岐阜大学国際交流委員会　No.24　1999年2月
NEWS LETTER

〔協定校ルンド大学（スウェーデン）の構内，この建物は1882年に落成。写真は同大学の概要から転載〕

未来からの大使

岐阜大学国際交流委員会委員長（岐阜大学長）　金城　俊夫

先日，ある会合で文部省の某局長から留学生は未来からの大使であるので，親日家として暖かく送り出してほしいという主旨のお話がありました。

確かに留学生10万人受け入れ計画に基づき，各大学とも積極的にその受け入れに努力を払ってきました。しかし，量的な面が優先され，質的な面が疎かにされた嫌いがありました。

通貨・金融危機等に見舞われているアジア諸国からの留学生や私費留学生の占める割合が増える中で，彼らの特に，生活環境は極めて厳しい状況下におかれています。

このまま留学生の生活環境に配慮することなく，受け入れのみを優先していくと，折角日本で勉強しても，親日家になるどころか，嫌日家になってしまう恐れさえあります。

現在の留学生は，10年後，20年後にそれぞれの国において指導者としての役割を担うでありましょうし，そういう意味では正に未来からの大使と言えましょう。

私たちは，未来からの大使たちを，日本で勉強できて本当に良かったと言ってもらえるように，支援の手を差しのべたいものです。

幸いにも，岐阜県内には国際交流にご理解をいただいている多くの公的機関，各種の企業や団体，個人の方々があり，留学生に対して物心両面から暖かいご支援，ご協力をいただいています。

これらの方々の善意のご協力なしには，本学の国際交流の質的向上は望めなかったことでしょう。

今後とも国際交流の輪を広げると同時に，未来からの大使たちを暖かく迎え，可能な限り支援をしていきたいものだと思います。

これまで本学における国際交流を支えて下さった多くの方々のご厚意に対して感謝申し上げるとともに，引き続きご協力を賜りたくよろしくお願いいたします。

ハノイ工科大学を訪ねて

教育学部教授　長野　宏子

東南アジアの伝統食品を探して，ベトナム行きを計画した1993年以来，ベトナムの食に魅せられ訪越し，ハノイ工科大学を訪ねている。大学構内は，緑があふれ４階建ての校舎は天井が高く，研究室は広く感じるが古さも伴っている。夏に訪問する機会が多いためであろうが，大きな木の下では友人とノートを広げている学生に出会う。大学中央の大木の下には小さなテーブルと低い幼稚園の時に使ったような小さな椅子が置いてある青空喫茶があり，ここにもコーヒー等を飲みに若者が集っている。

厳しい大学入試を合格した学生は，基礎課程を終わった時点で難しい試験があり20％位が落第するそうである。学生の最後の６カ月のうち２カ月は工場実習のようなもの，４カ月が卒業研究となるようである。ビール実習工場も大学の近くにあり，地ビールのような感覚なのであろうか，容器を持って買いに来る人も見かける。

ハノイ工科大学との学術交流協定締結に係わる調査報告（藤井・中須賀教授）によれば，ハノイ工科大学の教育制度の特徴の一つに生産現場で新しい知識や再教育を望む人々のために「出前講義」とでもいうべき地方での教育・研修制度が報告されている。バイオテクノロジーセンターのスタッフは，ハノイ郊外の米の麺の生産地に出かけて行き，麺製造業者に衛生・環境・効率等の指導を行っている。米の洗米水や浸漬水は，豚に，豚の糞尿のガスは大きなビニール（？）のパイプに収集し，食事用の熱量として使用している現場をみた。これも出前講義の一つであろう。

学生交流についての可能性は十分にあると思える。具体的には昨年の夏，教育学部の３年生は卒論の準備を兼ねて10日間，初めてベトナムを訪問した。行く場所，場所毎に，子供たちに取りまかれ，大歓迎を受けている。実際には体調を崩し，きつい思いをしているのに，異文化にふれ，心に残ったものがあったようである。今年も教員採用試験の次の日には試料採取の培地をもって，ハノイに向かって飛び立っている。交流協定が結ばれたので宿泊は学生寮も考えたが，今回は利用しなかった。岐阜大学が行っているサマースクールのような短期間のものが企画され，岐阜大学の学生が参加するようになれば，と思っている。

ベトナムとハノイについて

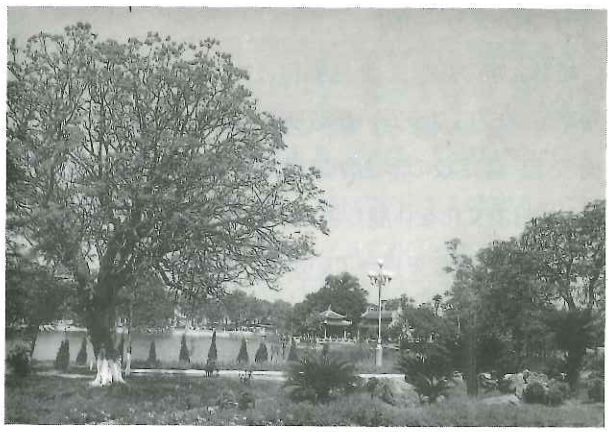
農学研究科　PHAM THANH HAI（ファム タン ハイ）

インドシナ半島東側に位置する細長いＳ字形の国。北に中国，西側にラオス，西南はカンボジアと接している。面積は33万平方キロメートル。九州を除いた日本の面積に等しい。人口は7624万人（98年）。そのうち，90％がキン族（ベトナム人）であり，その他はタイー族，ムオン族，ヌン族，メオ族，ザオ族などの50以上の少数民族である。言語はベトナム語を公用語とし，英語，フランス語が多少通じる。

北部の気候は亜熱帯気候で微少に四季もある。南部は熱帯モンスーン気候に属し，1年を通じて平均気温25度という暑さだ。南北によって，かなり差があることが特徴だ。

ベトナムの首都ハノイ（紅河の内側の意味）には，大は，ブールバルと呼べるような大通りから，小は十数メートルしかない小路に至るまで，全部で317の通りがある。このうち，「ハノイ36通り」とは，ハノイ市の中心部にあるホアンキエム湖周囲の通りのことである。この一帯は，往時の首都，昇龍（タンロン）のあったところである。「ハノイ36通り」には，当時この地に興った小商工業の名を付けたものが数多くある。

例えば，ホアンキエム湖から北へ3つ目の東西に走る筋にハン・バック通りがある。「ハン・バック」の「ハン」は商品を，「バック」は銀を意味している。つまりハン・バック通りとは銀通りである。昔，この通りには，銀鍛冶，装身具製造，換金業など，銀を扱う仕事に従事する人たちが住んでいたのでこの名がある。この通りはまた，古き昇龍のなかでも，比較的早くから商業が栄えた区域だったようだ。ハノイ36通りにはこの他，ハン・ドン（銅）通り，ハン・チョン（太鼓）通り，ハン・ベ（筏）通り，ハン・ドゥオン（砂糖）通り，ハン・ブン（そうめん）通り，ハン・カイ（盆）通り…などがあり，それぞれの歴史的由来を持っている。このような通りの名前にも，ベトナム首都ハノイの素朴で伝統的な一面がのぞけるかもしれない。



こんにちは！　留学生センターです

こんにちは。留学生センターには，現在5人の教官と9人の事務スタッフがいます。このページでは，日頃留学生に接している教官が，センターについて紹介したいと思います。

［日本語補講コース］

日本語を勉強したい人はいませんか？　岐阜大学には日本語補講コースがあります。このコースは，1週間に3～4コマ（1コマは90分です）日本語の文法や会話を勉強することができます。クラスは5つのレベルに別れています。4月と10月にプレースメントテストをして，どのクラスに入るか決めます。それから，買い物や郵便局などで使う日本語を勉強したい人には，「初級特別」クラスがあります。このクラスは1週間に2コマ、日本語の日常会話を勉強します。また，大学や大学院での授業やレポート作成，研究発表などで日本語が必要な人は，「専門日本語」に参加してみませんか。週2回，大学で必要な日本語を学びます。それと，医学部のキャンパスは遠いので，医学部にも補講コースがあります。こちらもぜひ参加してください。（橋本慎吾）

［日本語研修コース］

留学生センターには，6カ月間集中的に日本語を勉強するコース（日本語研修コース）があります。このコースは，岐阜大学へ文部省から来る留学生のために開かれています。でも，今岐阜大学の大学院生・研究生で，日本語が研究に必要な留学生は，指導教官の特別の許可があれば，このコースに入ることができます。（クラスのレベルにあわない場合は入れません）1週間90分×18コマで，20週間勉強します。クラスは朝8時50分から午後4時10分までです。とても忙しいコースです。このコースについて質問があったら，留学生センターに来てください。（宮谷敦美）

［全学共通教育の日本語教育］

学部向け全学共通教育科目の中に，日本語・日本事情教育があります。これは，上級レベルの日本語クラスで，外国語科目の単位にできます。この授業は学部留学生のためのものですが，学術交流協定校からの特別聴講学生は，レベルにあえば，クラスに参加し，単位をとることができます。（中須賀徳行）

［サマースクール］

岐阜大学の国際交流活動に，サマースクール（夏期短期留学プログラム）があります。6月から7月に，学術交流協定校の学生が岐阜大学で，日本語を勉強したり，日本文化を体験します。また，岐阜大学の学生とも交流する機会を持っています。今年の夏は，スウェーデンのルンド大学から9名，アメリカのノーザンケンタッキー大学から2名，韓国のソウル産業大学から5名の留学生がやってきました。

また，岐阜大学の学生が，スウェーデン，アメリカ，中国でのサマースクールに参加することもできます。興味がある人は，留学生センターへ問い合わせてください。

（中須賀徳行）

月曜日（げつようび）	10:00～12:30　14:00～17:00
水曜日（すいようび）	10:30～12:30
木曜日（もくようび）	10:00～12:00
金曜日（きんようび）	10:00～12:30　14:00～17:00

［留学生指導部門］

留学生の皆さん，岐阜大学での生活はいかがですか。わたしは，留学生指導部門の太田です。毎日の生活の中で何か困っていることや問題はありませんか。もし聞きたいことや相談したいことがあったら，どうぞ，私の研究室へ来てください。相談時間は次の通りです。

緊急の場合は，内線3194（058－293－3194）に電話してください。みなさんが，よい留学生活ができるようにお手伝いしたいと思います。どうぞよろしく。

（太田孝子）

在外研究報告

ルンド大学（Lund University）訪問記

農学部助教授　重松　幹二

ちょっと古い話になりますが，平成7年10月から10ヶ月間文部省在外研究員として，そして平成9年9月から3週間岐阜大学学術交流協定大学への派遣研究員として，ルンド大学を訪問しました。そこで，ルンド大学について皆様に紹介させていただきたいと思います。

場所・気候　ルンド大学ってどこにあるかご存知でしょうか？大学があるルンド市は，スウェーデン南部のスコーネ地方にあり，海を渡ればそこはデンマークです。実際，ルンド大学が設立された1666年ではデンマーク領でした。日本からは，スウェーデン首都のストックホルムを経由するよりもは，デンマーク首都のコペンハーゲンから船で渡った方がはるかに便利です。ルンド市の人口は約3万人ほどですが，その半分以上がルンド大学の教職員や学生である「大学町」であるため，いたって平和で安全な暮らしやすい町です。スウェーデンでも南部のため，比較的温暖な気候です。緯度が高いため冬は午後3時には真っ暗になるほどですが，北極圏まではかなり距離があり，残念ながらオーロラや白夜を見ることはできません。冬はマイナス20度ぐらいまで下がることがありますが，建物はどこも暖房が完璧で，防寒具のジャンパーの下はシャツ1枚と薄着です。人口密度が低いためか，道路は広く，渋滞はほとんどありません。高速道路も無料で，右側通行左ハンドルにもすぐに慣れます。車はほとんどがボルボかサーブです。今，スウェーデンとデンマークの間に橋を架ける工事が始まりました。やがてヨーロッパ本土と陸続きになることでしょう。

言語　スウェーデンの公用語は，何を隠そう「スウェーデン語」です。スウェーデン語の文法はドイツ語に似ており（似てるらしい），「ä」や「ö」が使われますが，特徴的なのが「å」も使うことです（下記のホームページをのぞいて見てください）。100億分の1メートルのことを表現するのにオングストロームという単位を使いますが，その記号である「Å」のことです。スウェーデン語は難しいそうですが，私はほとんど使わずに過ごしました。というのも，スウェーデンでは英語の教育が行き届いており，町のスーパーのおばちゃんとも英語で会話ができます。もともとドイツ系なため，日本人には非常に聞き取りやすい英語だと思います。英語の勉強をするためにスウェーデンに行くのも，いいのではないかと思います。

人柄　スウェーデン人は，一言「みんな親切」といえます。パンクカットにピアスを付けたお兄さんでも，乳母車をバスに載せるのを自ら進んで手伝ってくれます。

銀行やお店のレジでもキチンと順番を待ちますし，ゴミもキチンと分別してリサイクルしています。多分，平和な時代が長く続き，老後の心配がいらない国家だからでしょう。参考までに，スウェーデンはスイスと同じく自国の軍隊を持っていますが「永世中立国」です。第二次世界大戦では，ドイツはデンマークやオランダを占領しましたが，スウェーデンには一歩も足を踏み入れませんでした。

経済・福祉　スウェーデンは，皆さんご存知の通り世界有数の「福祉国家」です。その代償として所得税は50%，消費税は25%と非常に高額です。ただし，現地で収入がない私にとって所得税とは無縁でした。消費税率は高いのですが，日本に比べると物価が安いため，結局日本での生活とそれほど違いはありません。食料品に関しては，むしろ安いぐらいでした。逆に高いと思ったのが，意外や意外「医療費」でした。我々外国人でも１年以上滞在すると医療費は無料になりますが，それまでは１回約１万円ほどかかります。行かれる方は医療保険を忘れずに。なお，病院や薬局は全て国営で，あらかじめ予約が必要です。

大学の仲間たち　私は，ルンド大学のケミカルセンターという所の物理化学第一研究室で界面化学に関する研究をしていました。ケミカルセンターとは，日本で言う農学部・工学部・理学部の化学系の研究室が集まったところで，それらの境は既に全くありません。皆さん親切なので測定機器の貸し借りも楽で，様々な分野の方から幅広い知識を得ることができると思います。スウェーデン人の学生は半分ほどで，他はヨーロッパ各地から集まっていて非常にインターナショナルです。そのため大学内は英語が公用語となっており，スウェーデン語でおしゃべりしていたスウェーデン人も，私がイスに座ると英語に切り替えておしゃべりを続けてくれます。日本人も何人か滞在しており，特に医学系の人が多いようです。私の場合，子供がまだ１歳だったため日本人のお医者さんの留学生にとてもお世話になりました。

どこの国もそうだと思いますが，永く滞在するととても素敵な国に感じてきます。おかげで２度滞在した私も，チャンスがあればまた行きたいと思っています。日本から持っていった200V用電気釜を，また行く時まで研究室で預かってもらっていますから・・・

ホームページ案内

Lund University: http://www.lu.se/

Chemical Center: http://www.kc.lu.se/

Physical Chemistry 1: http://www.fkem1.lu.se/

留学体験記

中国での留学生活

教育学部理科教育（化学）

後藤　妙子

私が１年間の中国留学を終え，日本へ帰国してから１年半がたとうとしている。留学体験記をいざ書こうと思っていても，なかなか筆が進まず少し困っている。日本へ戻ってきたばかりの時は，家族や友達から「中国ってどんな所？」だとか「留学生活はどうだった？」と尋ねられて，私も，こんなことがあった，あんな経験をしたのは中国へ行って初めてだったとよく話していたのだが，いざその体験について文章を書こうと思ってもなかなかまとまらない。いくら考えても，考えはまとまりそうにないけれど，中国人の友達の住んでいる学生寮へお邪魔して中国でのごく普通の大学生の生活について教えてもらったことがとても印象に残っているのでそのことについて書こうと思う。

中国には，私立大学，公立大学はなく大学はすべて国立であり，学費や寮費は支払う必要はない。日本の大学生は，自宅から大学まで通える範囲ならば自宅から通い，通えない範囲ならばアパートなどを借りて下宿するというのが一般的であるが，中国では自宅から通えようが通えまいが，みな寮生活をしなくてはいけないし，男子学生は軍事訓練をすることを義務づけられている。彼らは寮で，４つの２段ベット，８コの机がぎりぎり置けるだ

けの８人部屋に住み，食事は大学内の食堂へ自分用の器とフォークを持参して，そこにご飯とおかずをつけてもらい済ませ，水のシャワーで体や髪を洗っている。

私は，寮の一室できいたその話に，驚いたのだけれど，友達のルームメイト達が自分の目標にむかって，明るいとはいえない部屋の中で勉強している姿にとても驚いた。

留学したことで，意志疎通がうまくいかないことの挫折感，日本人であるがゆえの差別などを受けたりと，日本にいては得られない貴重な体験ができ，貴重な友人達と楽しい時間も過ごすことができ，いろいろな経験をしたが，中国の生活を知ることで，日本についての理解を深めることができたことがとても良かったと，中国での留学生活を振り返り思う。

長々と書いてしまったが，この辺りで留学体験記を書き終えたい。（'96.８～'97.７浙江大学（中国）留学）

留学体験記

スウェーデンの生活と教育にふれて

工学部　応用化学科
長谷　洋見

ボタニカル・ガーデンに沿って歩き，石畳の道を30分ほど行くと，私たちが主に授業を受けた，白壁のメイン・ビルディングに着く。前方には，花で囲まれた噴水があり，すぐ近くには，12世紀に建てられた総石造りの大聖堂や民族野外博物館があった。ルンドの街も人も，穏やかで落ち着いた雰囲気があった。

午前の授業が終わると，私たちは，街を探検して，そこで見つけたカフェでランチをとったり，サンドイッチを買って外で食べたりし，それも一つの楽しみであった。

英語の授業では，輪になって座り，先生はとてもユニークで，リラックスした状態の中，楽しく授業を受けることができた。講義においては，スウェーデンの地方自治中心の政治政策や福祉制度など，学ぶことも多かった。また，一番印象に残っているのは，スウェーデンでは大学まで無料で教育が受けられ，大学では，自分が勉強したい分野はすべて選択できるということだ。高校を卒業

すると，ほとんどの人が親から離れ，パートナーを見つけて一緒に住んだりして，独立するそうだ。十分な生活費は，国から借りることができ，大学で勉強したい人は誰でも可能なのだ。

週末には，歴史的な祭りや他の都市に連れていってもらったり，パーティーに参加して，未熟な英語ながらも，様々な国の人たちと交流したりと，楽しく過ごした。自分の英語力のなさを強く感じたが，私たちの世話を主にしてくれた人はもちろん，寮やパーティーで出会った人も，親切で楽しい人達ばかりで，本当にスウェーデンでの生活を楽しむことができた。スウェーデンの自然も街並みも本当にすばらしく，心がなごむようであったが，それ以上に，たくさんの人々との触れ合いが，私にとって一番よい経験となり，これからも，何か，つながりを持っていきたいと思う。

（1998年サマースクールへ参加
'98.８.８～８.31　スウェーデン，ルンド大学）

外国人留学生からのメッセージ

My Experience at Gifu University : Difference of Culture and Education System between Bangladesh and Japan

First Department of Pathology
Gifu University School of Medicine, Japan
Rahman, K. M. Wahidur

During my stay in Japan, I found many differences between Japanese and Bangladeshi universities and schools in terms of the education system, management of laboratory, research funding, and university life. The Bangladeshi educational system has followed the British one, as the Japanese system has much owed the American one. The literacy rate in Bangladesh is very low in comparison with Japan, it is now approximately 43% at the primary level. However, the literacy rate has been increased, as our government has been very much concerning about the primary education.

The education system in Bangladesh is divided into four levels: the primary education from class 1 to 5, the secondary education from class 6 to 10, the higher secondary education from class 11 to 12 and the university level for graduation as well as the higher degree. The entrance examination is required for entering the school, in addition to the examination score, successful students are determined after the considerations to enroll universities, colleges, medical colleges, and other institutions for accepting the higher degree. Although over 98% of the people live in Bangladesh speak Bengali language, English is widely used as the second language.

I have experiences to visit some schools in Gifu city. I have much impressed that the relations between teachers and students were excellent and they are friendly each other. I had good opportunities, and I have much appreciated the situations of the schools. During my visit, the children at those schools tried to speak English. I think that they are interested in learning English and it is better to teach them English in the early education.

Laboratories in Japanese universities and schools are well-organised and well equipped. If we have enough money like Japanese universities and schools, we can afford to install the latest equipments to change our laboratory. I think that developing countries can introduce and follow the Japanese education system.

Number of educational institutions in Bangladesh is not enough for the people. At the moment, Bangladesh has approximately 45, 000 primary schools, 10, 515 secondary schools, 628 colleges, 9 governmental universities, 7 specialised universities, 9 medical institutions, 4 engineering colleges, and 2 technical institutions. Our research works are very restricted and collaborative works with foreign researchers are few, because of paucity of the funds. We are now trying to increase the number of educational institutions and research funds depending on foreign governmental aids including that from Japanese government in addition to our own internal resources.

Most of the government universities in Bangladesh have own hostels. The buildings of the hostels are separaled for ladies and gentlemen, although the university authority cannot provide accommodations for every student. I had an experience of stay at a hostel as a student of Dhaka University. Life at the hostel was enjoyable and memorable that would not be forgotten. One of the valuable things at the hostel was exchanging cultures between my own and other districts. It was very easy to be intimate each other. In case of Japanese universities, there are no hostels

for domestic students but overseas students. Hostels for overseas students in Gifu University are limited in number and living period. Japanese and foreign students are living in flats around the campus as it is hard to borrow the hostel.

I have enjoyed the university life in Japan more than I expected. We have given cultural programs at the campus presenting Bangladeshi culture. From my careful observation, Japanese students like to contact the foreign culture. This year I will go back to Bangladesh. I will not forget many interesting experiences of Japanese life style during stay at Gifu University.

Before closing this article, I have to refer the position and role of the international student association at the university. In Bangladesh, many universities as well as Dhaka University have the associations which can directly support the overseas and internal students on their administrative works for their benefits. Although there is an international student association at each university even in Japan, we have not such an association at Gifu University. If we, in terms of overseas students of Gifu University, have the association, preferably approved by the President of Gifu University, we can contribute to settling overseas student's affairs by means of providing our valuable opinions and suggestions. I am undoubtedly convinced that the association, organised by the University, can overcome misunderstanding between overseas students and administration officers.

（原文のまま）

外国人留学生受入れの経緯

工学部応用精密化学科
教授　高橋　康隆

当研究室では，これまで外国人を４名受け入れている。一人は中国の大学の職員（研究者）であり，残り３名は留学生である。その留学生の内１名は，インドのある企業の開発部門所属で，Ph.D. の学位をもった研究者であったが，我々がすでに発表している論文内容から，当研究室との共同研究を強く希望して留学してきたもので，１年間研究留学生として研究活動した後，昨年３月に帰国している。彼を受入れる別の動機として，すでにインドの留学生を受け入れていた同じ学科の箕浦秀樹教授及びその留学生からの推薦があったことも付言しておく必要があるであろう。彼は，大学推薦で文部省の奨学金を取得したが，約３年に亙り粘り強く応募した結果である。

残り２名は，チュニジアとインドネシアからの学生で，現在はそれぞれ工学研究科博士後期課程３年生及び博士前期課程１年生である。彼らは，それぞれの出身国で日本への留学生公募に応募し，大使館推薦によってその留学と文部省奨学金取得が決定されたものである。彼らを受け入れる直接の動機となったのは，彼らのそれぞれの先輩に当たる本学部または研究科への留学生からの強い推薦があったことによる。彼らは，日本で無機材料に関わる研究を強く望んでいること，また人物・学力ともに保証できるということであった。そこで，彼らの当時の指導者などからの推薦書を提出してもらうと同時に，彼らと手紙で数度接触して，その推薦者の評価と彼らの希望を確認した後に，「日本留学が決定された場合には，指導教官となる。」ことを示した文書（彼らから送付されたフォームに記入したもの）を本人に郵送するという，極めて単純な手続きによって受入が実現したわけである。実際に受け入れた彼らは，公式・非公式の推薦者が述べていた人物像にほぼ間違いはなく，留学してきた本人達も勉学・研究を楽しみながら極めて真面目に生活しているし，受入側としても素晴らしい学生と接することができて幸せに思っている。研究室内の日本人学生に対する刺激も大きい。これは幸運なことであるかも知れないが，少なくとも各国の大使館で，学力や人物が選定されてくることにもよるものと思われる。

現在も，電子メイルや手紙を通じて，次々と留学希望が舞い込んでいるが，時間や実験室空間の制限から，それに応じきれないでいるのが現状である。

国際交流奨学寄附金協力団体等一覧

（平成10年12月現在）

団体等名称	代表者氏名	住所	備考
株式会社十六銀行	清水義之	岐阜市神田町８－26	
岐阜信用金庫	音瀬晴夫	〃　神田町６－11	
株式会社大垣共立銀行	土屋　嶢	大垣市郭町３－98	
岐阜瓦斯株式会社	相馬雄治	岐阜市加納坂井町２番地	
大日本土木株式会社	鬼頭徳就	〃　宇佐南１－６－８	
財団法人田口福寿会	田口義嘉壽	大垣市田口町１番地	西濃運輸
イビデン株式会社	遠藤　優	〃　神田町２	建築材料等の製造販売・開発
太平洋工業株式会社	小川信也	〃　久徳町100番地	自動車部品，制御機器等の製造販売
岐阜車体工業株式会社	星野鉄夫	各務原市鵜沼三ッ池６－455	輸送用機械器具部品等製造・販売
中部電力株式会社岐阜支店	森本　正	岐阜市美江寺町２－５	
サンメッセ株式会社	田中良幸	大垣市久瀬川町７－５－１	総合印刷業
医療法人東山会長良川病院	森　省三	羽島市竹鼻町梅ケ枝町370－１	
株式会社スギヤマメカレトロ	杉山三郎	本巣郡糸貫町数屋1053－12	各種工作機械修理，改造
日本耐酸壜工業株式会社	堤　俊彦	大垣市中曽根町610	各種ガラス製品の製造販売
国際ソロプチミスト岐阜	鈴木禮子	岐阜市平河町12	国際交流団体
岐阜乗合自動車株式会社	大野　彰	岐阜市神田町９－１	
株式会社市川工務店	市川治徳	〃　鹿島町６－27	
昭和コンクリート工業株式会社	村瀬恒治	〃　明徳町10番地　杉山ビル	
株式会社文渓堂	水谷晃三	羽島市江吉良町2801	教育用図書，教材教具製造・販売
岐阜プラスチック工業株式会社	大松利幸	岐阜市神田町９－25	
パイオニア貿易株式会社	桐山芳春	〃　茜部大川１丁目88－２	貿易（機器）
岐阜県農業協同組合中央会	大池　裕	〃　宇佐南４－13－１	
河合石灰工業株式会社	河合進一	大垣市赤坂町2093番地	
長谷虎紡績株式会社	長谷和治	羽島市江吉良町197の１	
東海旅客鉄道株式会社	葛西敬之	名古屋市中村区名駅１－１－４	
コーテック株式会社	朝田晃年	大垣市米野町３－30	衣料素材，産業資材等の染色・接着等の特殊加工
株式会社ＫＶＫ	北村和弘	岐阜市黒野308	金属加工材料
株式会社後藤孵卵場	後藤静彦	岐阜市西野町７丁目北町13	
矢橋工業株式会社	矢橋慎哉	大垣市赤坂町188－１	石灰等製造販売
ユニオンテック株式会社	安部二郎	岐阜市中鶉１－30－１	建築総合設備
岐阜精機工業株式会社	皆嶋寛治	岐阜市六条南１－９－６	自動車関連部品，家電部品，金型製造販売

（順不同，敬称略）

国際交流状況について

1．岐阜大学外国人研究者受入数　　（H10.12.1現在）

区分＼学部	教育学部	地域科学部	医学部	工学部	農学部	その他	合計
私費	2 （1）	1 （1）	3 （1）	5 （2）	5 （3）	1	17 （8）
委任経理金 その他	0	0	4 （1）	4 （1）	4	0	12 （2）
合計	2 （1）	1 （1）	7 （2）	9 （3）	9 （3）	1	29 （10）

1か月以上本学に滞在し，岐阜大学外国人研究者受入れ規則に基づき，受入れを承認された外国人研究者をいう。

（　）内は，女子を内数で示す。

2．岐阜大学外国人研究者などの訪問数（1月未満）（平成9年度）

学部	教育学部	地域科学部	医学部	工学部	農学部	その他	合計
合計	21	0	29	18	48	38	154

1．以外で，本学に短期間滞在した外国人研究者等をいう。

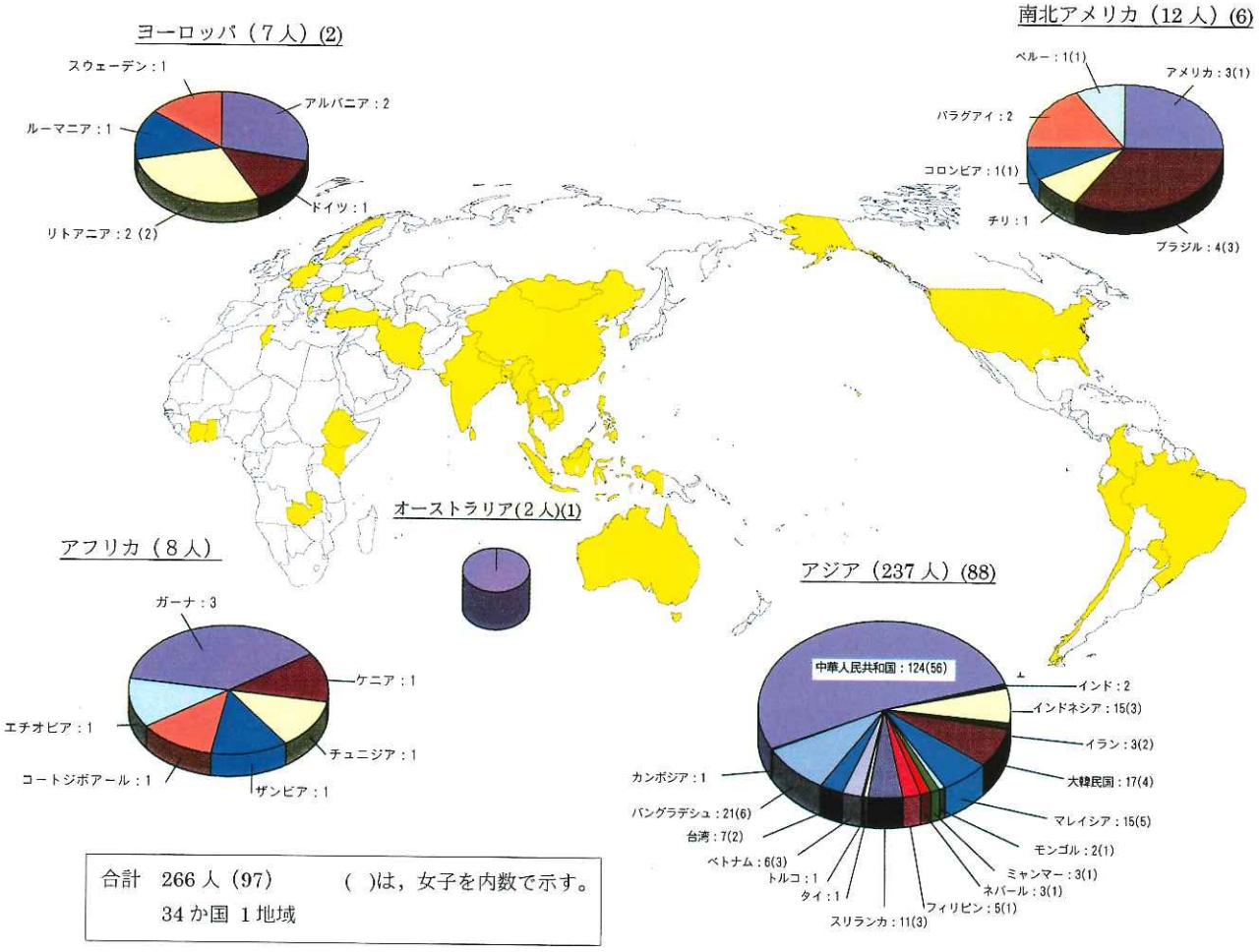
3．岐阜大学教職員海外渡航者数（平成9年度）

区分＼学部	教育学部	地域科学部	医学部	工学部	農学部	その他	合計
出張	20	7	81	121	52	17	298
研修	25	6	82	24	13	8	158
合計	45	13	163	145	65	25	456

（私事・休職渡航を除く。）

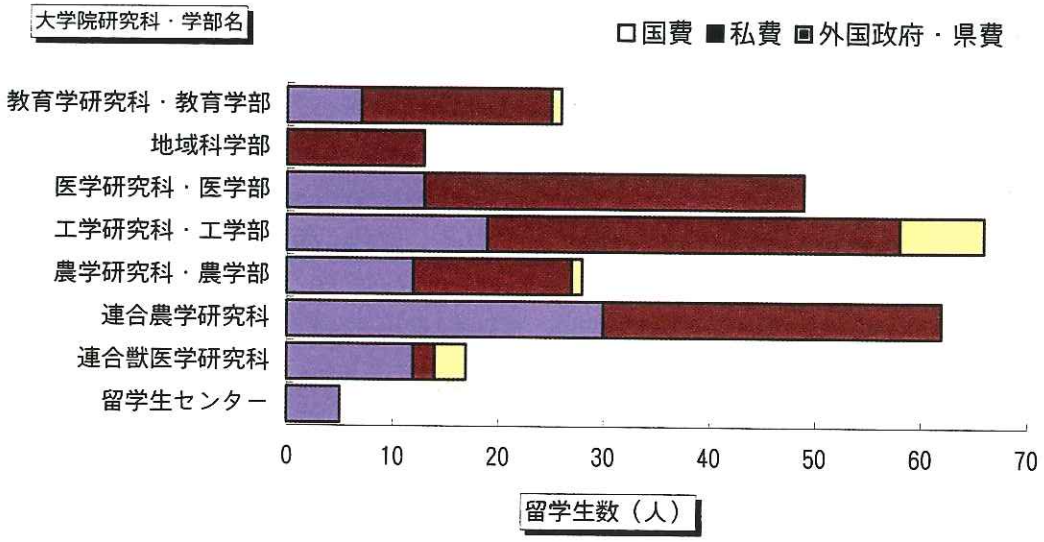
岐阜大学国別外国人留学生数

（1998年10月１日現在）



合計　266 人（97）　　（　）は，女子を内数で示す。
34 か国 1 地域

外国人留学生数（経費別）



1998年国際交流関係の主なできごと

月　日	事　　項
1月5日 ～10日	藤井学術交流専門委員会委員長他ハノイ工科大学訪問
3月10日 ～14日	ハノイ工科大学副学長他本学訪問
3月16日 ～18日	ユタ大学人文学部長他本学訪問
3月20日 ～21日	浙江医科大学長他本学訪問
3月26日 ～29日	金城学長他ソウル産業大学訪問
4月1日	ルンド大学（スウェーデン），ソウル産業大学(韓国）及びグリフィス大学（オーストラリア）との交流協定更新
6月17日 ～7月29日	岐阜大学サマースクール実施
6月27日 ～7月4日	広西大学長他本学訪問
7月1日	広西大学（中国）との交流協定改定
7月1日	ハノイ工科大学（ベトナム）と交流協定締結
11月10日 ～12日	フランシュ・コンテ大学長本学訪問
11月24日	平成10年度岐阜地域留学生交流推進協議会，外国人留学生懇談会開催
12月1日	第2回国際交流支援団体との交流会開催
12月16日	ウエストヴァージニア大学（米国）と交流協定締結

◆編集後記

岐阜大学国際交流委員会発行のニューズレター24号を，ここにお届けいたします。

本誌は，旧国際交流委員会のニューズレターを継承するもので，委員会発行としては，昨年度に引き続き2回目となります。岐阜大学の国際交流の一端を，皆さんに知って頂き，またその活動をサポートして頂くきっかけとなれば，幸いです。今回は，昨年7月に本学と交流協定を締結したベトナムのハノイ工科大学と，北欧スウェーデンの協定校ルンド大学の紹介をしています。交流協定があると，研究者や学生の相互の受け入れ等で，いろいろな便宜が計られる場合があります。

また中国，スウェーデンに留学した学生さんの手記，バングラデシュの留学生の方には，岐阜大学と日本の印象を語って頂きました。さらに，文部省奨学金による留学生を多く受け入れておられる，工学部の高橋先生に，受入れの経緯を伺いました。

より良い広報誌にして行くために，皆様の御意見・御要望をお待ちしております。

宛　先：研究協力課国際交流係（事務局1階）
(Tel 058－293－2141，Fax 058－293－2022)
編集者：学術交流専門委員会：本城勇介（工），天谷孝夫（農）
留学生交流専門委員会：小栗克之（地），宮谷敦美（留セ）
事務局・学生部：高木吉郎（研），粥川美重子（研）
河合正明（留），武井勝彦（留）